

まずは今回の遭難に際し、ご尽力いただいた吉野警察をはじめ奈良県警の皆様へ感謝申し上げます。

また、道標に誘引されたとはいえ事前の登山計画と準備不足により、多大なご迷惑をおかけ致しましたことを心よりお詫び申し上げます。

今回の弥山へは過去3度登っておりましたが、直前にいつもの道が崩落により通行止めだったため急遽、川合からのルートに変更することになりました。

事前にYAMAPの地図をプリントしスマホにスクリーンショットをしておき、当日も登山届けを提出した天川村役場で小冊子を入りました。

ここから出発からの11日間を振り返りたいと思います。

#### 8月4日（木）

早朝、Aさんが名古屋で私を拾い正午前に役場駐車場に到着、登山届けを提出後12時ちょうどに弥山小屋に電話を入れてから登り始めました。

遅い出発ではありましたが天気も良くコースタイムも6時間とお聞きしていたので、七夕（旧暦）の満天星を眺める事が目的の私達は日没迄に着ければと思っていました。

林道出合に着いたのが15時だったので少しペースを上げました。

そこは作業用の軽トラが何台か停まっていたのでどうしてここから登れる様にしないのだろうかという新たな登山口に苦々しい思いでした。

予想以上に長い工程で18時になった時、私のauスマホが繋がらなかったためAさんのdocomoスマホで再び弥山小屋に電話を入れました。

狼平を過ぎた頃には激しい雷雨となりましたが何とか21時に小屋に着きました。

夜中に何度も外に出ましたが、残念ながら今回の目的であった星空を眺めることは出来ませんでした。

持参したお酒を酌み交わす事も…。

#### 8月5日（金）遭難1日目

翌朝はせっかく来たからと百名山の八経ヶ岳に空身で行こうと思いましたが、山小屋の管理人から「八経ヶ岳からそのまま昨日来た道に戻れる」とのアドバイスをもらい、百名山の八経ヶ岳に登ってから下山することとなりました。

八経ヶ岳から下りしばらくすると道標に出ました。

そろそろ昨日の道に出る頃だと思っていたのでその分岐の示す「←トップリ尾登山口」と書かれた方に進みました。

ここが今回の遭難の始まりでした。

道標の一方は「明星ヶ岳」になっていて2方向しかないのでは疑うことはありませんでした。

（ここできちんと確認すべきであったと反省していますが、YAMAPにも天川村の小冊子の地図にもトップリ尾は載っておらず初めて耳にする地名でした。）

しばらく登山道が続きやがて大きな倒木に出たころ雨が降り出しました。

そこで雨具を着て先きを急ぐと広い尾根に出ました。そこがトップリ尾なのでした。

それまで数は少なかったものの、目印のテープがあったので正しい道を歩いていると思いましたが林間にはいるとテープが見当たらなくなっていました。（この時も位置を確認すべきであったと思います。）

しかし民宿に早く着かねばという焦りと、それまでは進めばテープがあったので、きっとまた目印が出でくると信じていました。

だんだん急坂になっても、昨日狼平からの急な階段をかなり登っていたので下っているんだから大丈夫だと思っていた。

あまりに急なので座り込んだ状態で滑り続けると沢に出ました。

この時に初めて道を間違えたのだと自覚しました。

しかし今日はもう戻ることは出来ないと思い沢の近くでビバーク場所を探しました。よく耳にするビバークという言葉ですが私が経験するのは初めてでした。民宿に電話を掛けてみましたがdocomoも入りませんでした。やがて2人が入れるくらいの大きな岩陰がありそこでその日は過ごす事にしました。念のために持参したレスキューシートを敷き、私は星を観るために持参したダウンジャケットをAさんはレインウェアを着、濡れた靴下を脱いでレジ袋にふたりの足を入れてこすり合いながらくっついて寒さを凌ぎました。この時は明日になれば帰れるものと思っていました。

#### 8月6日（土）遭難2日目

6時、前日にかなり下っていたので登るという選択ではなくこの沢を下って行けばとの期待を込めて進んだのですが2時間後堰堤に出たのでその先は進めませんでした。その手前に私達が1週間滞在する事となる古い小屋がありました。堰堤からやはり登って戻らなくてはいけないと思い折り返して下って来た沢の反対側の急な斜面を登って行きました。しかしどれだけ行っても同じ景色ばかり、木々が少し明るくなっている所が見えたので林道ではないかと私だけ登ってみましたがただ陽がさしているだけでやはり尾根ではありませんでした。体力もかなり消耗しこれ以上は無理だと判断したので先ほど見つけた小屋で今夜は過ごす事にしました。昨夜はとても寒かったので小屋に着いてまず杉の枝や葉っぱを集め火を起こしました。

#### 8月7日（日）遭難3日目

前日ヘリの音を聞いた気がしたので、7時に二人で小屋を出て堰堤手前の水の涸れた川原に行き長い木の枝に赤いバンダナを結びつけ、明るい色のスポーツタオルやAさんのオレンジ色の雨具や帽子を石の上に並べました。そして煙に気づいてもらおうと焚き火をしました。10時頃ヘリが上空を通過しました。11時半頃にも頭上を横切りましたが気づく事はありませんでした。ラジオを付けると高校野球が始まっていました。15時ごろ雷の音がしたので小屋に戻り雨に備えて錆びて穴の空いた屋根の補修をし火を起こしました。この時点でライターが切れこの火を種火としていかななくてはならなくなりました。雨が降り出したので小屋の中に焚き火を移しました。

#### 8月8日（月）遭難4日目

小屋の種火は絶やすことが出来ないのでAさんを残し小屋にあったガソリン缶に穴を開けて炭を入れ下の川原での、のろし作戦に向かいました。しかし昨夜の雨で昨日の焚き火場所や枝も濡れていて火を起こすことは出来ませんでした。堰堤を巻いて川を下ることを考えましたがあてのない深い谷を下る勇氣はありませんでした。（実はその先に吊り橋があり林道につながっていたのでした。）釣り人にでも気付いてもらえたらと、堰堤の下の川にビニール袋2枚に「SOS」と居場所を書いた紙を入れ流しました。そしてこの日もヘリが通り過ぎるのを虚しく見るだけでした。ラジオで安倍元首相の襲撃からちょうど1か月目だと知りました。

### 8月9日（火）遭難5日目

7時半今日もAさんを小屋に残しガソリン缶に大きめの炭を入れて川原に行きましたが杉の枝の炭はもろくこの日も失敗でした。

ヘリは午前1度、午後2度見ました。

ラジオで長崎の原爆の式典を聴き黙祷しました。

15時に小屋に戻り長崎のことを聴いたせいかな終戦記念日ももうすぐだなと何故かシベリアで強制労働させられた人達の事を思い描き夕方まで黙々と枝葉を集めました。

### 8月10日（水）遭難6日目

朝7時今日こそはと今回は倒木の太い炭をガソリン缶に入れ川原に向かいました。

時間はかかったものの10時頃ようやく火起こしに成功し炎が激しく舞い上がりました。

その時、急に雨が降り出し火が消えてしまうと思った矢先、焚き火から灰色の煙が立ち上がりました。

濡れた方が煙が目立つと気づきそれからは木陰の湿った落ち葉やナイフで杉の枝を切り落としヘリに備えて夢中で集めました。

そして13時頃ヘリの音がしたのでどんどん燃やし見事に黒っぽい煙が空に向かって立ち上がりました。

大成功でした。

しばらくするとヘリがそれに気づいたのか初めて正面を向いてこちらに向かって来たので折り畳み傘を開いて大きく振りました。

「助かる」思わず笑顔が出ました。

そしてヘリは向きを変え向かいの鉄塔辺りでしばらく旋回をしていました。

しかしあろうことかヘリはそのまま過ぎ去ってしまったのです。

違う救助用ヘリが来るのかとしばらく待ちましたがもうヘリは来ませんでした。

絶対に分かったと思ったので落胆はひとしおでした。

小屋に戻る途中、魚がたむろする川にガソリン缶に紐を付けて沈めて来ました。

ラジオで大谷選手がベイブルースの記録を既に更新した事を聴きました。

### 8月11日（木）遭難7日目

昨日、あまりにも落胆したので堰堤に行く気力はなく小屋のすぐ下の川原で焚き火するようAさんをお願いしました。

搜索が打ち切りになったと知るよしもありません。

その日ヘリの音はしませんでした。

ガソリン缶を沈めた所に行ってみましたが魚は入っていませんでした。

### 8月12日（金）遭難8日目

いつもの様に下の川で顔を洗いながら私の中ではもうヘリは来ない、いや来ても見つけてもらえないんだとの思いが渦巻いていました。

この日は小屋の周りの枝を集めただけで、滑って来た時に空いたズボンの穴を繕ったり足の靴擦れの手当てをして、私には少しきついAさんの靴を履いて感触を確かめたりと出発に向けての準備をしました。（私の靴はソールが剥がれていたため靴を交換しました）

### 8月13日（土）遭難9日目

出発の緊張からか落ち着かず5時前には身支度を始め、手ぬぐいを割いて足の傷のケアをしている時、木にも目印をしていこうとAさんに手ぬぐいで短冊をたくさん作ってもらいました。

時間が表示される携帯ラジオと余分な衣類はAさんに残し、その代わりAさんのdocomoスマホを預かり1時間ごとにタイマーをセットしました。

Aさんにはダメなら暗くなる前に戻る、でも17時を過ぎても戻って来なかったらそのまま行っただと思って欲しい、2日かかるか3日かかるかわからないけれど小屋で頑張っていてねと告げました。

涙ぐむAさんに救助されてから泣こうとハグしました。

そして6時半、GPSで唯一確認出来た真北の役場方面を目指し出発したのでした。

それから12時間後、やっとの思いでたどり着いた尾根で奇跡的に電波が入りこの度の救助となりました。

今回の反省点としましては、きちんとした詳しい地図を入手して事前にコースの下調べをして行かなかった事。

コースを外れている時にもっと早く気づき、元の場所に戻らなかった事。

この事が最も反省すべき点であると思います。

9日間耐えられたのは装備、非常食は充分で沢の水がいくらでも飲め、顔や髪を洗えた事で悲壮感なく過ごせたと事にあると思います。

星を観ながら飲もうと持参したアルコールも気休めになりました。

ライターがあったことも火を起し寒さや動物からも身を守れたと思います。

最後に9日間捜索にあたってくださった警察、消防、山岳会、そしてSNSで情報をくださった方々、無事を祈って待っていてくれた友人や家族、その方々のことを思うと私の最後の日の12時間など大した事ではありません。

14日の山岳会の自主捜索のため大阪から駆け付けて下さった方もおられました。

この様な皆さまのおかげを持ちまして無事帰ってこれましたことを重ねてお礼申し上げます。